

【書評論文】

おネエはジェンダー規範を越えているか？
—クレア・マリィ 『「おネエことば」論』 書評—
Does ‘O-nē’ Cross the Border of Gender Standards?
-- A Review of Claire MAREE’s “On the ‘O-nē Language’”

門倉正美

【キーワード】

おネエことば、おネエ、言語資源、メイクオーバー・メディア、テロップ

Keywords: ‘O-nē Language’, ‘O-nē’, Language Resources, Makeover Media, Telop (Subtitles)

NHKの『スポーツ酒場 語り亭』(2013年～現在放送)の「ママ」、ミッツ・マングローブの「おネエことば」は友人のマツコ・デラックスほど毒を含んでなく、あたりが柔らかい感じをうける。そこがNHKで起用される場所なのかもしれない。それにしても、日本の話し言葉の規範を提示する使命を負ってきた(ように見える)NHKも「おネエことば」の「ママ」を許容するようになったのは、時代にたいするNHKの迎合を表しているのだろうか。そう言えば、2014年のNHKの朝の連続ドラマ『花子とアン』の語り手は、「おネエことば」というには恐れ多いが)美輪明宏だったし、朝ドラに続く『あさイチ』には、「おネエ」のカリスマ華道家、假屋崎省吾が時々登場する。お昼のバラエティでは、教育学者・教育評論家の尾木直樹の「尾木ママ」ぶりが紹介されたこともあった。

と連想しつつ、いや、そもそもNHKが話し言葉の「規範」者であるとか、そのNHKが「おネエことば」を「許容」するとか、ミッツとマツコの「毒」の強弱を比較したりなどという、こちらの受け取り方そのものに「ことばとジェンダー」に関する、根本的な先入見があるのかもしれない、と反省させられたりもする。これは、クレア・マリィの『「おネエことば」論』(青土社、2013年)に触発されたからかもしれない。

『「おネエことば」論』は、「おネエことば」の分析をもとに、現代の「ことばとジェンダー」研究の特徴をいくつかの点で明示的に提起した好著である。以下、それらの特徴のうち、私の観点からみて特に興味深い点を順に紹介したい。

1. 「言語規範」から「言語資源」へ

クレア・マリィによれば、「おネエことば」は「男性が利用する女ことば」ではなく、「女ことばのパロディ」であり、「話芸」であったり、「複合的なアイデンティティのひとつの拠り所」とさえなったりするものである(pp.13-15)。しかし、とクレア・マリィは続ける。主流メディアに登場する「おネエキャラ」は「ジェンダー規範をパロディしているようにはどうしても見えなかった。むしろ、現代メディアが作り上げているジェンダー図式や恋愛に基づく異性愛規範を「再現」し、その規範に回収されているようにも見えた」(p.16)。ここには、この本の核心となる主張が表明されている。もともとゲイ・コミュニティによって培われた「女ことばのパロディ」、つまり「女ことば」という言語規範への抵抗表現としての「おネエことば」が主流メディアによって篡奪され、既成のジェンダー図式や異性愛規範の「再現」へと、180度反転したイデオロギー表現となってしまっている事態を批判的に暴露する点である。

『おネエ★MANS!』(日本テレビ制作、2006年～2009年放送)というバラエティ番組の精緻な談話分析を通じた、こうした「篡奪」のプロセスの活写は、「ことばとジェンダー」研究の方法のひとつのモデルとして重要であり、その点は次節で述べる。ここで押さえておきたいのは、「女ことば」や「男ことば」を、女性・男性という自然的性に基づく言語行為としてではなく、社会のジェンダー秩序によって「作られた」言語規範と見る構築主義的視点である。そうした構築主義的観点からすれば、「女ことば」や「男ことば」は、さまざまな年齢、職業、出身地域、階級集団と結びついた言葉づかいの知識とともに、自らのアイデンティティを表現するための「言語資源」として位置づけられることになる。

クレア・マリィによる「おネエことば」の分析は、「おネエことば」という、現代社会におけるジェンダー秩序の境界領域に生息する言語現象を通して、「言語規範」という言語観と「言語資源」という言語観のせめぎあいを浮かび上がらせている。

2. メディアの介在

「女ことば」がテレビ・ドラマや小説などのメディア表現で実生活においてよりもはるかに多用されているという事実については、すでに本学会および本誌で研究されてきている。また、「女ことば」そのものが、明治期に当時の女学生の「てよ・だわ」言葉を新聞や小説などのメディアが引用・論評することを通じて広く認識されるようになったことに端を発している(中村桃子『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房、2007年)。言語規範としての「女ことば」の普及は、言語規範の大本である標準語の普及と同様、メディアの介在によって促進されるのである。

金水敏(『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、2003年)は、「わしが発明したんじゃ」という「博士語」や「あたくしも賛成ですわ」といった「お嬢様ことば」が実生活では使われることのない、もっぱらマンガなどのメディア表現でのみ流通する「ヴァーチャル日本語」としての「役割語」であることを看破したが、「役割語」もメディア表現という枠組なしには生成し得ない言葉である。

クレア・マリィは、「おネエことば」を「一種の役割語」(p.27)と解釈して、『おネエ★MANS!』というバラエティ番組における「おネエキャラ」の「役割」を、番組の全体的構造における「おネエキャラ」の位置の解明と、「おネエキャラ」の発言に添えられるテロップの分析の両面から論じている。

2.1 メイクオーバーの体現者としてのおネエ

近年のテレビ番組には、「メイクオーバー (makeover:改造・イメージチェンジ)」といったジャンルがある。『大改造!! 劇的ビフォーアフター』(朝日放送ほか共同制作、2002年～現在放送)では、住宅が改造を経て劇的にすばらしいものとなり、バラエティ番組のコーナーでは、さえない風貌の夫や妻が美容師やスタイリストのアドバイスや指導を経ることによって、これまた劇的に変身する。

おネエキャラのテレビ・メディアへの浸透を大いに促進したバラエティ番組『おネエ★MANS!』でも、美容、服飾の専門家であるおネエキャラが、あまりセンスのよくない芸能人を叱咤激励して「すばらしい人」に変身させるコーナーがある。この種の「変身物」では、変身すべき人物はまず変身の手助けをする専門家から、センスの悪さを徹底的に批判されたうえで、それにめげずに奮励努力して、なんとか変身を遂げるという筋書になっている。この前段階における変身対象者をめちやくちゃけなすというプロセスで、おネエキャラの「おネエことば」による毒舌の冴えがモノをいうわけである。おネエのようなジェンダー越境がない、ふつうの言語折衝で、つまり

男性にせよ、女性にせよ、通常の言い方でされれば、批判された人も、視聴者も不快になりかねない辛口の批評も、おネエことばで語られれば、やり過ごすことができるわけである。メイクオーバーの助言者としてのおネエは、美容や服飾の専門家であるとともに、辛口批評を許容範囲の言語表現でなし得るという特性をもっているのである。

しかし、クレア・マリィは、メイクオーバー・コーナーにおけるおネエキャラの「役割」をもう一つ別の面にも見ている。それは、おネエ自身が自己努力によって「さえない（ないし、ふつうの）男性」から「すばらしい女性（?）」へと変身を遂げた、メイクオーバーの体現者、ないしはメイクオーバーのシンボルであるという点である。

そのうえで、クレア・マリィは、メイクオーバー・メディア一般の現代的意味を指摘する。個人の変身を促進するメイクオーバー・メディアは、「現代社会のガバナンス（統治）の一環として働く」（p.103）というのである。ポスト福祉国家では、国家は国民の福祉を第一に重要視することはもはやなく、「格差社会」であっても、「国民一人一人に自ら「自由に」選び取った「自己責任」で自らの生活をコントロールさせる社会」を生み出す。おネエキャラが推進するメイクオーバーは、こうして国家や資本の新自由主義戦略にからめとられていくのである。

2. 2 テロップを読み解く

『おネエ★MANS!』では、新技術によって多様多彩となったテロップが、特におネエキャラの発言のシーンで乱れ飛んでいる。日本のテレビ画面に、「圧倒的に文字テロップが増えたのも、「実況中継」のような側面を得たのも、2000年代に入ってから」（p.112）とのことである。

筆者は、メディア・リテラシーやビジュアル・リテラシーの観点から、視覚表現と文字テキストとの複合的表現のあり方に注目してきた。その点、テロップは非常に重要な表現現象であり、筆者の記憶では、『ここがへんだよ 日本人』（TBS制作、1998年～2002年放送）でテロップが時に漫画のセリフのように多種類のフォントや符号が多用されていたのが印象的だが、ウィキペディアの項目「バラエティ番組」によると、『進め! 電波少年』（日本テレビ制作、1992年～1998年放送）か『探偵! ナイトスcoop』（朝日放送制作、1993年～現在放送）が元祖とされているようだ。

本書で、クレア・マリィは、『おネエ★MANS!』におけるおネエキャラの発言と、その画面に付されたテロップをとりあげ、その文脈を見ながらテロップの果たしている効果や役割を分析している。近年、談話分析は録音記録だけではなく、ビデオ記録によって表情、仕草、視線、距離の取り方など多種多様な言語外コミュニケーションにも注目するようになってきているが、テロップの分析は、そうした言語外コミュニケーションを考慮に加えることとは別の視点を談話分析にもたらしめている。いずれもメディア表現であるがゆえのことだが、一つは、テロップが番組制作者による制作後の「付加物」であるという点であり、もう一つは、テレビ画面という枠内の映像表現に貼り付けられた文字テキストであるという点である。

「メディアはすべて構成されたものである」ことは、メディア・リテラシーの基本中の基本であり、実況中継以外の番組（もちろん実況中継でも、どこから、どのように撮るかに、すでに「編集」要素が入っている）では番組全体が撮影後に制作者によって「編集」されているわけである。クレア・マリィの分析によれば、『おネエ★MANS!』の多様多彩なテロップは、「編集」作業による制作者の「ものの見方」の後付けをくっきりと映し出している。

例えば、IKKOが「いつも、あやしい女でいたい（笑いながら）」と画面で言ったときに、テロップは「いつも／妖しい女でいたい」（「妖しい」＝表象色の反転）と出る。そのIKKOの発言を受けた、「普通人代表」のメイン・キャスターの山口達也が「確かにあやしい」と受けると、

テロップは「怪しいよね 確かに」(「怪しい」=黒文字に紫の網掛け)、「笑い声(効果音)」となる(p.124)。「あやしい」という話しことばに振られる漢字が使い分けられ、その意味を強調するように、語順を変え、網掛けがされ、「笑い声」が付け加えられている。「あやしい」のテロップにおける「妖」から「怪」への変化は、MCの山口を「普通人」代表と位置づけていることに表れているように、「おネエキャラ」を「所詮怪物である」(p.82)とみなす制作者たち(やMC山口)の伝統的なジェンダー規範にのっとった視線を露呈しているようにも見える。

番組制作者が「おネエキャラのことば」に装飾的なテロップなどのポストプロダクション技術を施すことによって、「ジェンダー規範を越境する「未来人間」としての「おネエキャラ」の存在は、むしろ古典的なジェンダー規範を強化する逆説へと転化する」(p.77)のである。

3. 「おネエことば」は「男ことば」(?)

クレア・マリィも指摘しているように、これまでのところ、「男性語や男性のことば遣いに関する研究は非常に少ない」(p.39)。これは、どうも日本においてだけではなく、世界的な傾向のようだ。フェミニズムや女性学に刺激されて独自の活動を展開するようになった男性学の中でも、言葉の分析はまだあまり緒についていないように見える。

管見に入ったところでは、英語圏では、Sally Johnson, Ulrike Hanna Meinhof (eds) (1996): *Language and Masculinity*, Blackwell に続く力作が20年近くを経てようやく2015年に出版された段階である(Tommaso M. Milani (2015): *Language and Masculinities: Performances, Intersections, Dislocations*, Routledge)。ドイツ語圏では、447ページの大冊でSusanne Gunthner, Dagmar Hupper, Constanze Spiess (eds) (2012): *Genderlinguistik: Sprachliche Konstruktionen von Geschlechtsidentitaet*, Walter De Gruyter があり、『ことばと社会 16号 特集:セクシュアリティ、権力、攪乱』(2014)で、吉田達彦が紹介している。

ところで、クレア・マリィの『「おネエことば」論』は、考えようによっては、「男ことば」論——「男が(言語資源として)使うことば」という意味では——とも言えるのではないだろうか。日頃、男に許容される言葉づかい(あるいは、自分自身の「言語資源」が、ということかもしれないが)がモノ・リンガルの貧弱に思えて仕方がない者としては、永六輔がすでに1980年に「オカマことばはすばらしい」と題した談話を表明していたことに、あらためて遅ればせの共感をもった。永によれば、「男ことば」よりも「女ことば」のほうが怒ってもやさしく感じられるという理由で、萩本欣一も自分も「オカマのちょっと手前」のことばをつかうのだ(p.47)とのことで、「男ことば」「女ことば」に対する先入観を利用した受け取り方であり、構築主義の観点からすれば「問題あり」とされるのかもしれないが、男の使う言葉づかいを増やす戦略としては、納得できる。尾木直樹の「尾木ママ」への変身には、多少女装的な面も加わっているようでもあるが、基本線としては永の考え方の延長上にあるように思える。

(かどくら まさみ・横浜国立大学名誉教授)